THE DUTCH IN JAPAN

2009 年 11 月 4 日

1　単語

単語 (THE DUTCH IN JAPAN p6)		
行	単語	意味
1	canal	(名) 運河, 水路
	cobblestone	(名)(鉄道・道路舗装・壁用) の丸石, 玉石 (本文では形容詞的に使ってる)
	cosy	(形) 居心地の良い, 温かみのある (=comfortable)
2	Amsterdam	(名) アムステルダム (オランダの首都)
3	lifesize	(形) 等身大の, 実物大の
	replica	(名)(絵画などの) 模写, 複写, 複製品
	landmark	(名)1. 陸標, 目印 (旅行者などの) 2. 歴史的な建物, 旧跡, 名所
6	royal	(形)1. 国王の, 王家の 2. 風格のある, 超一流の
	residence	(名) 住宅, 居住
9	graffiti	(名・複数形)(柱や壁に傷をつけてできた) かき文字, 落書き (単数形；graffito)
16	subsidise	(動)〜に補助金を与える,〜を援助する
22	ambassador	(名)1.〜駐在の大使 2. 使節, 代表, 使者
23	turn down	(熟)〜を断る
24	be due to〜	(熟)〜することになっている
27	venue	(名)1. 訴訟原因発生地 2. 開催地 (今回はたぶんこれ), 発生地, 現場
28	picket	(動)〜にさくをめぐらす,〜に見張りを置く, 監視する
	leading	(形) 主要な, 主な, 先頭に立つ
30	outrage	(名) 暴力, 侮辱, 失礼, 侵害, 激怒
32	modification	(名) 修正, 変更
34	indiscreet	(形)(言動が) 無分別な
36	ignite	(動)〜に火をつける,〜を奮起させる
	fury	(名) 憤激, 激しい怒り
44	architect	(名) 建築家, 設計者
45	donation	(名) 寄付, 寄贈
51	rename	(動)〜に新しい名をつける
53	broadcast	(動)〜を放送する
63	tour	(動)〜を旅行する
73	stern	(名) 船尾, 尻
76	fateful	(形) 重大な, 運命に支配された, 不吉な
78	reminder	(名) 思い出させるもの
80	shipmate	(名) 船員仲間

行番号をつけたら表の左にある行の欄が利用できます。[*1]

[*1] 行番号は,p42 の最初の行を 1 として, ページ内にある太文字は除いたものです。

2　まとめ

2.1　p41 までのあらすじ

up が遅くなって申し訳ないです。今回も、前回同様、担当ページ以前のあらすじをまとめてみたいと思います。[*2]

本文は、日本とオランダとの関係について、オランダとのかかわりが生じ始めた 16 世紀以降のところが歴史を追って書かれています。まず、ジェームス・クラベルの小説"*Shogun*"[*3]が導入として紹介されていて、日本とオランダの関係はかれこれ 4 世紀にわたると述べられています。

ここからは、歴史的経緯がひたすら述べられていきます。日本に最初にきたヨーロッパ人は、ポルトガル人であり、1570 年代になると、地元大名の手によって、長崎が開港されます。(ザビエルだとか鉄砲だとかの紹介もありますね。) その後、将軍が Ashihara → Hideyoshi → Ieyasu になり、覇権が移り変わっていきます。このころちょうど、オランダが世界を周航して 1600 年には日本 (南の方) に到着するんですね。家康は、オランダがポルトガルの敵だと知って、喜んだとあります。なぜか？それは、

1. ポルトガル自体に疑念を感じていた。

2. ポルトガルの宣教師の日本に対する影響をなくしたかった。からだそうです。それで、1603 年の関ヶ原の戦いで、オランダ人に対する信用を深めて (戦いを助けたから)、2 人のオランダ人を老中？にまで登用したそうです。

その後、VOC(=オランダ東インド会社) が、1609 年に設立され、この会社の船が平戸[*4]にやってきます。オランダの皇帝から授かった、貿易を提案する旨の手紙に、家康が同意し、オランダと日本の貿易が始まります。家康は、キリスト教の宣教師たちによって、反対勢力が出てくるのを恐れて、どんどんポルトガルへの締め付けを強めていきました。1641 年には、ポルトガルを完全に追放します。オランダとの貿易も平戸→出島になり、世界のほとんどとシャットダウンしてしまいました。

1641 年→ 1853 年まで出島は日本にとって、西洋との唯一の貿易の窓となります。これが、歴史上独特の関係を双方に生み出したと本文では書かれています。西洋では、科学革命の時期に入り、様々な発見がなされていくわけですが、そういった発見が VOC を通じてしか入ってこない。だから、世界に関心のある日本の学者たちにとって、オランダ語は、必須言語となったそうです。17 世紀には、オランダは世界の貿易の覇権を握ります。VOC は、セイロンやバタヴィアなど世界のさまざまなところに出先機関を作ったのですが、そこで働く人数に比べたら、日本の出島で働く人の数なんてちっぽけなものだと、書かれています。でも、ちっぽけな出島での貿易は重要だったわけです。1688 年まで銀の輸出を禁じていた日本は、大量かつ安価な銀の供給源だったからです。(ここでは、具体的な輸出入品についての記述もありますが省略)

ところが、18 世紀になると、繁栄していたオランダの貿易も衰え始め、イギリスやフランスといった他のヨーロッパ諸国にとって代わられることになります。日本での VOC の出先機関を廃止する話し合いが行われた上、日本におけるオランダの貿易は損失を出してしまいました。

このように、貿易が衰退してくると、逆に皮肉なことに、オランダの日本文化に対する影響が出てきたんですね。15 世紀後半ぐらいまでには、ポルトガル語が商業用の言語として使われていましたが、18 世紀までに

[*2] 今回の文章はわりと読みやすかったので、別に要らないって言う人は読み飛ばしちゃって、次の 2.2 から入ってください。

[*3] 戦国時代、日本に漂着した英国人水夫（リチャード・チェンバレン）が英語の話せる武士の妻に導かれ、時の将軍に召抱えられるまでの数奇な運命の物語である。ウイリアム・アダムスの史実が下敷きになっている。

[*4] 長崎そして九州本土としては最西端に位置する都市。鎖国前は国際貿易港。

はオランダ語にとって代わられることになりましたね。ここから、日本の学者たち (=蘭学者と呼ばれることになる) は、オランダ語を使って西洋の科学に熱心に学習していくことになります。この蘭学者たちが、日本の新たな探究精神に貢献していきます。そして、その探究精神が、日本全体に広がっている封建制度への異議を引き起こしました。(適塾[*5]、福沢諭吉などが挙げられていますね。) 1850 年代になると、日本は開国するわけですが、そのときにオランダ語が実は、国際言語ではなかったことを、当時の日本人は思い知るわけですね。その時の日本人の驚きと落胆は容易に想像できるわけですが、オランダ語はたしかに日本語に影響を与えたんだという例が、色々と挙げられています。(例えば、ビール、コーヒー・・・などなど) 18 世紀後半までには、なんか出島は観光地になったみたいです。(お土産として、外国人や力強い船が描かれた版木などが売られる。) それで、日本人から見たオランダ人の固定観念的なことがいろいろ書かれています。(オランダ人は５０歳まで生きれない、犬の目を持ってる、かかとがない、小便する時は犬みたいに足を上げる、そして性欲がめっちゃ強いとか。長崎に雇用されていた多くの女性がこの印象を助長していた。)

逆に、ヨーロッパの人にとっては、日本はまだまだ得体が知れなかったんですね。VOC のメンバーぐらいしか接触が無かったからですね。(VOC のメンバーについての記述がいろいろ書いてありますが、またまた省略)

やっと、19 世紀の話に入ります。アメリカがやってきて、日本は開国します。そして、それと同時に、オランダとの関係も薄れていきました。もちろん、すぐには、オランダの影響力がなくなるということはなかったんですが、徐々にですね、日本での特別な地位もなくなり (意思伝達の役割を果たす、秘書？や通訳などの)、世界でも小さなグループになります。

しかしながら、オランダはたしかに日本に対して、素晴らしい遺産を残したと述べられていきます。日の丸の起源とか・・・。

20 世紀になると、日本は帝国主義[*6]のもと、他国を次々と侵略していくわけですが、その過程で、現在のインドネシアをめぐって、オランダと衝突するんですね。この戦争が尾を引いて、一旦は関係が悪化するんですが、1950 年代にはふたたび国交が正常化し、文化的、科学的な連携をとるようになりました。

ここまでが、前回のあらすじというか、書いてあることをぐだぐだ書き連ねていったわけです。長すぎました、すんません。

[*5] 適塾（てきじゅく）とは、蘭学者・医者として知られる緒方洪庵が江戸時代後期に大坂・船場に開いた蘭学の私塾。適塾は全国から駆けつけた塾生にあふれ、談論風発 (=いろいろな意見が交わされること。) の気風はその後の明治維新の激動の中、日本の運命に大きく貢献した多くの人材を輩出している。適塾は元来は医学、医療を教育する塾であったが、青雲の志熱き若者である塾生たちにとってはオランダを通じてもたらされる最新の知識、技術には一々驚くものがあったのだろう。関心の赴くところを制限されることもなく各種の本をどん欲に読んだようで、その基礎となったのは、適塾で行われていた蘭書の会読会であった。判らぬ言葉の意味を探して、適塾に一冊しかなかったヅーフ辞書 (→ヅーフとは、Hendrick Doeff のことで、江戸後期のオランダ商館長で、蘭日辞典を完成させた。) を奪いあうように利用した。そのため、辞書をおいた部屋はヅーフ部屋と呼ばれ、明かりが消える間がなかったといわれている。そのくらい熱心に勉強したってことですね。

[*6] 一つの国家が、自国の民族主義、文化、宗教、経済体系などを拡大するため、新たな領土や天然資源などを獲得するために、軍事力を背景に他の民族や国家を積極的に侵略し、さらにそれを推し進めようとする思想や政策。

2.2　p42 のまとめ

ようやく担当ページですね。といっても、ここは今までに比べたら、さして重要な個所ではないと思いますが、一応まとめてみます。オランダと日本・・・・その過去にはいまだに敏感なところがあるそうです。例として、第二次大戦中のオランダ、インドネシア、日本の関係についての展示会があったとき、日本のオランダ使節団はこの展示会を断ったそうです。大東亜戦争[*7]について引っかかるところがあったそうです。でも、文化的な面においては、友好的な交流がおこなわれているとも述べられています。最終段落では、冒頭に出てきた $Liefde$ について書かれていますが、これの像が見つかりましたよって言うぐらいの事だから、そこまで深入りしません。自分の担当ページは、あんまり分量がありませんでした。今までの個所に比べたら大して重要なことは書いてないですから、テストでも問われないでしょう。

以上です。何かあれば、まつうらまでどんどんいってください。

[*7] 戦時中の日本では、対米英並びに対蘭及び対中戦争を「大東亜戦争」と呼称していた。大東亜戦争は太平洋戦争と同義であるとしばしば認識される。